
60のまばたき

S・ropez・E

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

60のまばたき

【Nコード】

N5264F

【作者名】

S・ropéz・E

【あらすじ】

思春期にありがちな無気力の少年が一人の少女と出会い、巻き込まれていく話です。ブログ<http://ameblo.jp/eropéz/>

ヤツとの出会い（前書き）

素人^{へたくそ}の著者なんで、つまらないと思ったたら戻ることをお勧めします。

ヤツとの出会い

いつからだろう？。同じ毎日を繰り返し続けたのは…。
いつからだろう？。この眼に映る景色が灰色に見える様になったのは…。

いつからだろう？。感情をなくしてしまったのは…。
いつからだろう…いつからだろう…。

もう意識を保つのも疲れてきたよ…今日何曜日？

なんか景色暗いなあ…天気が悪いのか？

なにしにここに来たんだっけ？身体が覚えてるか…。

なんでここにいるんだっけ？覚えてないや…。

俺の存在理由？。特に意味はないんじゃない？

俺ってなんだ？。俺っていう一人称は誰のこと指すんだ？

なぜ俺は産まれてきたのだろうか…誰に聞けばいい？。

自分で答えを考えるのもメンドクサイなあ。答えなんてハナから無いか。

これの名前ってなんだっけ？。決めたの俺じゃないしどうでもいいか。

すべてを考えるのもメンドクサイよ。メンドクサイと思うのもメンドクサイ。

すべてを考えるのをやめようかな？。そうだ、それ名案。

いつそ人間やめちゃおうかな？。選択肢が増えた。ラッキー！。

俺にマウスポインタ合わせて右クリックをして削除選択して、その後、ゴミ箱クリックして『ゴミ箱を空にする』で消えないかなあ…。

誰か消しくれないかなあ。

俺をこのモノクロの世界から

一章

今朝も騒がしい機械的な音で目が覚める。音だけはでかい。何の変哲のない目覚まし時計だ。朝からストレスが溜まる。忌々しい。これから朝食を食って、高校という施設に行く事を考えるとため息が出る。自分の父らしき人物が作ったと思われる1杯200円のコーヒーについてるモーニングセットにしても粗末な手抜き朝食が4人掛けのテーブルに置いてある。自分自身、『味など興味ないから腹に入ればみな同じ』の考えのためこの粗末な朝食を胃袋にぶち込むでしょう。同居人は自分の父らしき人物ただ一人、もうしばらく会話してないな。最近では、亭主閑白の代名詞であった「風呂。」「飯。」「寝る。」は子のセリフとどこかのサラリーマンが川柳で嘆いてたが、それすらも言っていないな。どうでもいいが。

朝の芸能情報ばかり情報番組を見ながら、だらだらと高校という施設に行く準備をする。とりわけて行きたいわけではないが行かないと暇すぎてどうしようもないので、時間つぶしのために行く。これで推薦入学だというから高校の面接官は人見る目がないなと実感する。時刻は朝8時過ぎを回り、たいして中身の入っていない高校指定の紺色のカバンと一度も洗濯していない高校指定の学ランを着る。夏服になったばかりだ。そして、靴の少ない玄関で高校指定のローファーを履き、鍵もかけずに玄関を出た。鍵なんか持っていないし。

団地の2階の我が家と言っていていいかわからない家から高校といわれる施設までは徒歩で15分。校則で自転車通学は許されない距離に該当するため徒歩のみの通学だ。守ってるのは自分だけらしいが。

起伏の激しい土地のため結構な熱量を消費する。景色は3か月で見飽きるほどの殺風景な道、一応『市』だが南側と違い北側のこの地域は3方向を標高100m未満の山に囲まれている。南側は海もあり有名な観光地もありサーファーズのメッカだが、北側の名物はこの国のトップ10に入る大学のキャンパスとこの市内で一番大きい市立図書館しかない。一応首都まで行ける私鉄の駅があるがここからだと徒歩20分ぐらいかかる。でも急行電車は止まるので駅は割と混雑している。大学には付属の高校もありその高校は野球が強くて学力も高いためこの学区内では中間ぐらいにある我が公立高校よく比べられてあまりいい気がしない。学校までの通学路で見えるのはこの大学のキャンパスと付属高校だけなので見飽きるのも当然だ。

梅雨明け間際の束の間の晴天。前日が大雨だったせいかわゆる『台風一家の』『雲ひとつない』『抜けるほどの』などのいろいろの比喩がある晴天の今日。「週明けには、関東も梅雨明けです。」と天然パーマの天気予報士が言っていたが、まあどうでもいい。「清々しい青空だね。」と一般的は思っらしいが、今の自分にとっちゃただの暑い日。色なんかも昔のテレビのような、白と黒のコントラストと何も変わらない。

暇潰しに高校へ行くが、校内に居ても暇には違いない。結局は、ただただ退屈な時間を、数年前から続く退屈な時間を過ごすだけなんだ。そう思ったら死にたくなってくるが、痛いのは嫌だし、無痛の死に誘うための道具を用意するのもメンドクサイ。理想は、誰かに無痛で殺してもらうこと。『なら最初から産まれてこなければよかったのに』そう思うこともしばしばある。

体感時間90分ぐらいかかりようやく学校に着いた。教室に入り無言で自分の席に座る。この間誰も自分に声をかけることはない。いてもいなくても一緒の空気みたいな存在、例えるなら原子番号2、元素記号Heのヘリウムと言ったところだ。大気中の0.0005%を占める程度の存在だろう。担任の教師が来るまで自分の机に伏せている。腕がしびれてきたら顔を上げる。いろいろな声が聞こえ

るが、全力でシカトするのが自分のクオリティー。

4時限目授業が終わり、学食へとぼとぼ歩く。そこで気付いた。

「財布忘れた……。」

理由としては十分だ。今日は早退することにしよう。

とぼとぼ教室に戻り、たいして中身の入っていない紺色のカバンを持ち、誰にも声をかけることなく帰路に着いた。

極力体の機能を抑えていたので、たいして空腹感はない。成長期の実感なんか感じることもない。帰路に着いたつもりだったが帰っても暇だったので決して計画的ではない予定を変更することにした。

「図書館に行くか……。」

独り言を漏らし、市立北図書館に歩みを進めた。

学校から、北東に500m。不動産表記上は徒歩6分ちよつと、実際には10分の道のりをとぼとぼ歩く。市の開発がうまくいったせいなのかはわからないが、片田舎に似合わず片側3車線の県道の歩道を歩く。まあ、どう考えても片側3車線も必要はないな。道の広さ、道の綺麗さ、景色のきれいさを見ると車で走っているとすごく気持ち良さそうだ。一般論的ではの話だけだな。いちようではない木が植えてある並木道の歩道を途中に4階建ての市立北図書館が見えてきた。通称なんてものはないが、あえてつけるなら……。

『ルービックキューブ?』

『?』マークはすごく重要だ。

入口は二重の自動ドア、中の気温は28度ぐらい、目の前に見える職員がいる受付兼返却口は全部で6つに区切られている。とにかく大きい施設である。ルービックキューブと比喻したのは、外壁のタイルが揃ってないルービックキューブの一つの面が大量に張り付

けてあるようなセンスの悪い見た目だからなのだが、中は意外と普通だ。図書館独自の静かな空間で、勤勉な大学生が必死にシャーペンを走らせているのが見える。立地上、大学生が多いのは当たり前だろう。1〜3階は図書があり、4階は会議室みたいな部屋が2つある。

1階は主に週刊誌と図鑑、辞典の類がある。2階は、主に児童書とパソコン。3階は、主にCDとパソコンと図書がある。1階は週刊誌があるせいが多い。コンビニで立ち読みするよりマシだからだろうな。自分も同じ考えなのでけなすことはできない。とりあえず、今日発売の週刊マンガ雑誌を手に取り、6人がけの頑丈そうな机の下にしまつてあつた背もたれのある背と臀部の座席部分のみ合革のクッションがついた金属製の椅子を引き、腰かけた。週間のマンガ雑誌は、意外とすぐ読み終わってしまう。何故ならすべてを読んでもるわけではないからだ。毎週自身の見てるマンガだけを見てる人も多いだろう。自分もその類で読んでも多くて5本ぐらいだ。どんなにゆっくり読んでも30分ぐらいで読み終わってしまい、また暇を持て余すことを避けるため、立ち上がり館内を徘徊した。そこにヤツは居たんだ。

高さ185cmぐらいの本棚の通路、丁度ここは図鑑エリアだ。そこに、身長150cmちょっとであるう、どう見ても成人女性には見えない見た目の女の子が困っていた。ぴったり目で小尻のジーンズと少し大きめのTシャツを着た髪の短い少し日に焼けた体に起伏の少ない女の子を観察することにした。

観察していてわかったのは、どうやら本棚の最上部にある何かの本を取ろうとしているみたいだ。うんうん唸りながらつま先立ちしている姿は、愛玩の小動物のような微笑ましさがある。試しに近づいてみてみるとしよう。少々足音をたてて近づいてみる、すると彼

女はこちらに気づいたみたいで、こちらの顔を確認してから
「すみません……。あれとつて貰えますか？」

と、指を差しながら声をかけてきた。かなり意外だったのは、見た目は成長の遅い小学校6年生から中学1年生ぐらいの見た目ののに、声が目を瞑ると性別が全く分からないような女性にしては低めの声だった。指の先には分厚い凶鑑が何冊あったが、正直何を差ししているのか曖昧だった。それに加えこっちを見てる眼が嗜虐心しやくをくすぐるような眼で、今から言い訳をしよう

「魔が差してしまったんだ……」

彼女の背後から脇の下あたりに手を入れ、子供やるような『たかい高い』の要領で上に持ち上げた。思ったより重かったのは内緒の話だ。

「わつつつ!!」

と声を上げる女の子。でもこちらの思惑を理解したのか持ち上げてから2秒後に本棚から本を取った。

本の重みを両腕に感じる。両腕は限界に近かった。

腕を下ろそうとした時のことだった。何かが聞こえたんだ。

「……してやるう。」

その瞬間下腹部に激痛が走る。その痛みで後ろに倒れ、さらに女の子の尻が腹部に刺さる。いわゆるヒップドロップというやつだ。女性のことはよく知らないが少々硬い尻で、とつさに腹筋に力を入れたのに、最初の一撃とは違う種類の苦しい痛みが走った。

概要は、こうだ。

彼女は「仕返ししてやるう。」と言った後、右足を前に出し、後ろに振りぬいた。丁度彼女の右足のふくらはぎの部分が、股間に直撃し、激痛で倒れたひとに尻で追い打ちをかけた。

魔が差したというか……。自業自得というか……。一方的な被害者というか……。兎に角、痛みに悶えている人間に彼女はこう言った。

「にやははは。ざまあみろ。」

彼女は見た目のかわいい鬼だった。

数十分後、ようやく痛みがおさまり、立ち上がれるようになった。立ち上がりあつという間の出来事の事を思い出す。

「なんなんだアイツは!？」

この声は、図書館に響き渡った。

帰り際に図書館の女性職員に「館内では静かにしてくださいね」と言われて、

「すいません」とカラ返事をした。考えることはただ一つ

「なんなんだアイツは!？」

出入口から外に出ると太陽の光が眼に刺さるほど眩しかった。気持ちいいほどの午後の天気だった。

ヤツとの出会い（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
以後よろしく願いします。

螺旋(らせん)日々(前書き)

前話のあらすじ 無気力、死にたがりな男子高校生が図書館で一人の少女と出会った。

螺旋（らせん）日々

この世界の地理においての高さは、海水面の高さを基準とした標高を海拔という。海水面より高かったら海拔+（プラス） m、低かったら海拔-（マイナス） mと表記できる。しかし、海面より低い場合は深度や水深を使うのが一般的だ。

そして深海とは、一般的には水深200mより深い海を指す。がしかし厳密な定義は存在しない。つまり漢字が意味の通り『かなり深い海』の解釈でいいだろう。この地球の海^{ほし}の平均水深は3729mで深海と呼ばれる海面面積は全海面面積の約80%を占める。光合成に必要な太陽光が届かないため、植物性プランクトンが存在できないので、表層とは大きく生態系が異なる。また、高水圧、低水温、暗黒などの過酷な環境条件に適応するため、生物は独自の進化を遂げており、生物は特異な形態、生態を持つものも多数存在する。

『 1 』

この海の奥深く 君が思うより奥深く
僕はここで生かされているのか

冷たい水 ここではすべてが冷たい
暗い景色 ここではすべてが暗い
重い圧力 ここではすべてが重い
そして 乗ってはいけな流れが存在する

この世界で育ってしまった僕は

成長という名の逃げ道を得てしまった

この耳は音のない世界でも音を聴き逃さず
この鼻はどんなモノの匂いでも逃さず
この眼は光をかるうじて感じれる程度の視力で
この眼はヒトの心を見透かせる

聞きたくない音もある

嗅ぎたくないモノもある

見たくないモノもある

信じたくない真実もある

痛いから僕は逃げることにした

そうさ僕は 醜い深海魚

『 2 『

1・・・タイトル不明

2・・・この一行不明

確か続きもあったような・・・

2章

初夏の眩しい太陽光を浴びながら、家路に着く。市立北図書館から『我が家』と言えるかどうかはわからない団地、『夢香瑞団地』^{むかすみずみ}までは、実際徒歩で15分程度の距離だ。団地から学校までが15分。学校から市立北図書館までが10分。市立北図書館から団地までが15分。地図上だと位置関係は、見事な二等辺三角形になる。どうでもいい雑学だ。図書館から団地に着くころによやく下腹部の痛みは治まり、より深い思考をこなせるようになった。

冷静に振り返ると、図書館で出会った少女と自分の行動は、常軌を逸していたことに気付く。まず自分の行動だが、普通「届かないから あれ取つて下さい」と言われたら、素直にとるよな。なのに何故少女後ろに回り、脇から手を入れ、子供にやるような『たかいたかい』をした？。いつもの自分だったらそんな行動はしないのに…。そして、少女は何故持ち上げている自分「一人称」の股間をを蹴った？。転倒の危険があるに。結果自分は転倒したわけだが…。

いろいろあったので礼については言及しないことにしよう。

考えることをしながら歩いていると、体感時間が短くなる体質なのか、いつも苦痛のはずの徒歩が楽に感じられた。午後二時半頃に我が家(?)がある夢香瑞団地に着いた。まだ授業中のはずだが、自分はこのにいる。形式上は、何も連絡しないで学校を早退したわけだ。C-203の玄関を開け一番最初に目についたことは、固定電話のランプが光っている。留守番電話がある合図だ。いつもなら聞くことはないが、今日は気が向いたので再生してみることにした。

「ピー、一件です。」

機械音声の後に

「こんにちは、真一君の担任の坂本です。今日、何も連絡も無く早退したようなので、理由を聞かせてもらいたくお電話いたしました。本日でしたら七時ごろまで学校にいますので、連絡待っています。」と、甲高い声が再生された。

担任の何先生か忘れたが、仕事熱心なこと・・・。

理由といわれても・・・自分の中では理由としては十分な理由だが、財布を忘れただけじゃ一般的には通用しないことぐらいはわかる。金の持ち合わせがなければ、教師に借りるとかできるはずだ。ましてや、一般的な高校生が昼食に1500円を超えることなんてまずない。借りた金を返すのも容易なはずだ。なのでこの話は無かったことにしようとの結論に至り、何も言わずにこの留守電を消去した。さて、家に着いてもやることは特にない。テレビを付けても地上波は、視聴者層のよくわからない、くだらないワイドショーか、再放送のドラマしかやっていない。結局は学校に居ても、家にいても暇なものには変わりないんだ・・・。

鬱陶しい制服を脱ぎ、パンツ一丁になり自分のベッドの上に乗る。冷房を付け忘れたことに気づき、エアコンのリモコンを探す。いつも定位置に置かないせいか、よく見失うは自分だけじゃないはずだ。枕の下にあつたりリモコンでエアコンの電源を付け、仰向けに寝転がり一段落ついた。

天井を仰ぎながら、額の上に左手の甲を置いた。これが癖になっているようだ。この度に目障りな痕が見えてくる。なぜ目障りなのか明確な理由はないが、どう見ても切り傷が治癒した痕だ。

形成外科の先生に任したら、こんな痛々しい傷痕にはならなかっただろう。左手の甲に刻まれた、十文字の傷跡は・・・。

親指を下にしたら、ドラキュラも一目散に逃げ出しそうな、きれいな十字架のように見える。手の骨を見たことあるだろうか？手をX線照射装置で撮影すると手首から指と言えそうな骨でできている。その中指から手首までの骨の甲の部分に3cmぐらいの傷が一本と、その線の中心を89°：91°ぐらいのほとんど直角に交差する、長さ5cmぐらいの傷で左手甲の十文字は構成されている。触れると神経も通っているので、ちゃんと感じる。人体の神秘でもある。

さてこの件はひとまず置いてといて、楽な姿勢を取ったのは、寝

るためではなく、考え事をするためである。議題は二つ。一つ目は、担任にどう言い訳するか、二つ目は、あやつのこと。

前者は、捨て置いても然したる問題はないが、後者は、そうはいかない。どうでもいいことと自分でもわかっているのだが、自分の感情がそれさせてくれない。たかが一つの出来事で、自分の脳が支配されているは、腹立たしいことなのかはよくわからない。今まで思考を停止して流れるままに、虚無に、死にたいと思いつつ生きてきたのはずなのに、一つのことになんか気がなつてしょうがないという感情は、初めてだ。相手は、年下かもしれないのに。いや、むしろ外見は、年下以外ありえないだろう。そうなると馬鹿馬鹿しい。

「ホントになんなんだろうな……。」
独り言をつぶやいた。

ベッドの上で、言葉にするのは恥ずかし過ぎる妄想や憶測を考えているうちに、いつの間にか寝てしまった。起床したところには、夏の太陽でもすでに西に沈んでいるところで、長時間寝たつもりはないが、起きたら頭がすっきりしていたのは、何故だろう。

携帯の時計を見ると18時を示しており、正味3時間は寝ており、昼寝として人の価値観によつては長時間になる時間だった。この日は日が高く、この時間でも容易にキャッチボールができるほどの明るさで、日の朱が心に染みいる色合いだ。もっとも一般論でしかないが。

脳も完全に覚醒したところ、自分の体にある異変を感じた。この感じは人間として良くあることであり、この原因を探ってみることにした。

『今日の昼に財布を忘れたことに気付き音もなく早退して、帰り道の途中で図書館に寄って、特殊な事件を体験し、その後はまっすぐ家に帰り、睡眠。』

「腹減った……。」

空腹感だ。そういえば昼食食ってない。

寝起きの重い体を起こし、閉め切っている自分の部屋の引き戸を開け、隣りの部屋である冷房の全く効いてない団地によくあるダイニングキッチンの、冷蔵庫の中を覗いた。別に料理が出来るわけではないので、覗いたって空腹が満たされるわけではない。冷蔵庫に入っていた水出しの麦茶の容器を取り出し、コップを出すのが億劫おっくうだったので、容器に口をつけ、直飲みをした。男には良くあること本能のまま麦茶を飲んだおかげで、多少胃が膨れて、それに伴い体内で消化活動が再開された。冷房の効いてない夏の室内で大量に水分を取ったので、体中の汗腺から汗が吹き出し、尿意も催おほした。トイレに入り、放尿しながら『晩飯までどうするか?』を考えている時に、古い団地によくある、鉄の熱で膨張して重い玄関のドアを開く音がした。トイレという個室でも聞こえる耳障りな音だ。もちろんドアがひとりでに開くことはなく、誰かが開けたわけで、入ってきたのは自分以外のもう一人の住人の初老の男性だ。

「ただいま」

誰もいないかもしれないのに、律儀に挨拶をして、入室してきた彼は、多分法律上、自分の父親であろう人だ。頭髪の比率は白髪のほうが多く、顔には深い皺がいくつもあり、手は異様に大きい50〜60代の男性だ。トイレから出るとダイニングキッチンのテーブルの上に、駅前のスーパーのビニール袋が置いてあった。中には半額のシールが貼ってある弁当2つと30%引きのシールが貼ってある中華クラゲとポテトサラダが入っていた。男性は冷蔵庫を開け、ビール風の『その他雑酒』を一本取り出して、椅子に腰かけ、袋に入っているものをすべて取り出し、テーブルの上に並べた。見るからに栄養バランスの悪そうな夕食で、いかにも半額で安かったからという理由で買ってきたような弁当と惣菜だ。そんな献立でも、弁当を見ただけで、自分の脳が空腹を思い出したようで、胃がキリキリと痛み出した。ビール風『その他雑酒』を飲んで中華クラゲをつま

んでいる男性の対角のイスに座り、弁当のビニールを乱暴に破った。普段なら冷たいおかずは耐えがたい苦痛で、レンジで温めてから食べるのだが、余程空腹だったのか、サバannaに居る実はネコ目のハイエナのように、弁当を貪った。

そんな食いつぷりを見ていた男性が

「お前、行儀悪い。」

と、もう高校生になる自分に注意しているが返事はしない。

空腹ゆえにはなくもともとそうだ。いつからかは、もう忘れたがこの男性と会話しなくなった。この男性だけ例外ではなく、ほとんどの人間と会話しなくなったと言ったほうが、状況は正しく伝わる。(だから今日の事が気になるのか・・・)

箸を走らせながら、思った。

ものの5分程度で弁当を食べ終え、弁当のゴミを捨てに台所に向かい、捨てた後冷蔵庫に入っている麦茶をコップ1杯飲み、自分の部屋に入った。男性はビール風『その他雑酒』を飲みながら、そんな自分を目で追っていた。

部屋に入るとダイニングキッチンのほうから、テレビの音が聞こえた。音から察するに、夕方のニュースで6時半ごろに民放各局(一部を除き)がこぞって放送している特集コーナーで、今日のテーマは『激安!大盛りの店』と、よく職業のわからないリポーターがタイトルコールをしていた。

その後、チャンネルをあちこち変えてる音が聞こえたが、どうやら消去法でこの局に決まったようだ。

そんなBGMを背に、自分は退屈を持て余していた。いつもそうだ。今毎日が、生きることが、退屈にしか感じられない。人には『若いからやりたいことが見つかって無い』か『死んでいるようだ』と比喻されそうな状態だが、前者はできれば何もしたくないし、後者は生命活動はしているのでどちらとも当てはまらなと勝手に思う。

「死にたいな・・・」
ベッドで横になりながら、ため息混じりの常套句を吐いていた。

最近身につけたテクニクで、今考えられる最大の暇つぶし方法がある。それは、『何も考えない』ことだ。

目を開けてはいるが眼球に映っている景色は脳内に通さず、思考を完全に停止して、随意運動を抑え、できるだけ不随意運動のみをしている状態に持って行く高等テクニクだ。さながら、禅寺で修行している僧が住職に「心を無にしなさい」と言われる『無』の状態に近いかもしれない。

こうでもしなければ、本当に消えていただろう。この『何も考えない』という行為は、潰れないように、消えないように本能が取った『逃げ』なのだと気付いたのは数か月後のことだった。

いつの間にか寝てしまい目覚めたのは朝だった。朝日がカーテンの下の隙間から差し込み、それだけでも体内時計が目覚めの時間を示していた。うるさい目覚まし時計も鳴り出し、半目でふらつく足を引きずり台所に行くと誰もいないが、温かい粗末な朝食が置いてあった。黄身がつぶれたハムエッグ、付け合わせにはラッキョウ、そしてごはん、汁物は毎度のことながら無い。まあ「朝は食欲がないからこんなもんでも十分だ」と体内はおっしゃっている。

テレビを付けると芸能情報ばかりの朝の情報番組がやっている。韓国のスターが来日？知らないしどうでもいい。この情報を求める人はいるのだろうか？

だらだら朝食を食べていると時計の針は8時過ぎを指し、制服を着て家を出た。徒歩で起伏の激しい道を進む。

ほら、また、同じ毎日の繰り返しだ。

それから1週間ちよつと経ち、気象庁は正式にこの地域の梅雨明けを発表し、学校の夏休みまであと1週間半に迫った木曜日。少し前に出会った女のことなんかとくに忘れていた時のことである。学校からの帰宅中に、いつも読んでいる週間のマンガ雑誌の発売日なので、通学路を少しはずれた大学のキャンパスに面している交差点のコンビニ『k o 大学前店』に立ち読みを目的に向かった。この大学のキャンパスは山の中にあり、付属高校も同じく山の中にある。蚊が多そうだ。

コンビニで立ち読みを終え、店を後にし、交差点の信号で待っていると背中を突かれた。後ろを振り返ると肩越しに少女の顔が見えた。

「おお、やっぱりキミだったか。」

見覚えのうつすらある幼い顔、顔の割には低めのテンションの高い声、あつ股間蹴ったやつだ。

突然の再会、思いもよらぬ場所での再会に自分の体が固まるのがわかった。『鳩が豆鉄砲を食らったよう』という慣用句があるがまさに今の自分の状況を言うんだろう。しかし、少女はお構いなしに「今度の日曜の11時にここ集合ね。頼んだよ。あつ信号が青だ、じゃあねええ。」

少女は高速で去って行った。

少女にいろいろ聞きたいことがあつたはずだった。でもとっさに出てこなかった。こんな再会を想定していなかったせいで固まってしまうていた。チャンス逃した自分に憤りを感じていた。

(あれ？そう言えばあいつなんか言ってなかったか？)

頭が混乱していたせいか思い出せず、自分の進行方向の信号は点滅をしていた。

螺旋(らせん)日々(後書き)

読んでもらいありがとうございます。ぜひ次話も読んでいただけ
たら幸いです。ブログ <http://ameblo.jp/eropez/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5264f/>

60のまばたき

2010年10月9日13時17分発行